11

「箱」

一一　★　箱

部屋のすみっこにダンボールがひとつ。建物の構造の影響でできたちょっと窪んだスペースにぴたりと収まっている。邪魔になるわけでもないしとりあえずこの場所に、と置いて、もうひと月は経つ。

中身は、手元に残しておこうと思った本や、『有吉の壁』でよく見る、〇（まる）×（ばつ）の音が鳴るおもちゃといった小物がいくつか。季節の飾りなんかも入ってる。どれも暮らしに欠かせないほどのものではないので、そのままになっていた。

最初のうちは、「ちょっと手が空いたら開けよう」と思っていたんだ。でも、日が経つにつれて、ダンボールがフローリングの色に溶け込んでいき、その存在が妙に空間にフィットし、そこにあって当たり前のものとでもいうように、すっかり気にならなくなっていった。ダンボールというもの自体、『仮のすがた』って感じがするし、明らかに異物なのだが、案外どんなものでもそこにあり続ければ馴染んでしまうものだ。

それでも、ときどき目に入ってくる。部屋のすみに置かれたまま、じっとしている箱。久しぶりに触れてみたら、表面に少しだけ埃が積もっていた。

今の生活には必要ないけれど、それでも自分が選んで箱に入れたものだ。開けてしまい直すのは簡単なのに、まだ今ではない気がしている。たぶん、目まぐるしく変化する日常のなかに、変わらないものを求めているんだと思う。

ほどよい暮らしって、使うものと、使わないけど持っているものとのあいだにあるのかもしれない。

たとえば、1台で何役もこなす家電製品に対して、めったに読み返すことのない本や、特別な時にしか使わないカップなど。その“あいだ”に、ストレスを感じることのない、豊かで心地よいポイントがあるのではないだろうか。

『使うもの』だけで生きていくのは効率的だし、便利ではやいものを追求する時代の流れには合っている。でも、ふとした夜に、誰かがどこからともなくＵＮＯ（ウノ）を持ち出してきて、「ルール、どうやるんだっけ？」なんて言いながら過ごす時間も、きっと大切な役割を果たす。わかりやすい効果ではなくても、じわじわと。

今はまだ、あのダンボールのままでいい。すこし埃っぽくなった手を軽くパンパンと叩いて、クイックルワイパーでそっと撫でておいた。